南嶺子

冬

049.1
Ta131n

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n

ガラス使用

金ガナケレハ飯ガ喰レヌホモ金ガ出來ルトコヽ
稲荷
ヲ云ヒ神モ拜ベキ自分ノ
棚ヲ上人ノ下ハ大キニヨセハ又働者コロシメノ神運者ガスベツメノ
主ガヘヨセツタノト是モ又大キニヨセハ此世界ニハドノヤウナ
ルカモシレヌモシナイテ吏ヨリ自分ノ身ヲカシガヘテ見ルガイヽ
此ヤウナヽヨ言テ人ニモハルクイハレテデハナイカ人ハドヲテモダ
サハニテ又神ニタヽリナモト言テアルケレドモ又可笑々々馬鹿ヤリヲ
マツテイロヨヌレバ人モナントモイハヌ

有屋サン笑テ
有吉笑ヒ玉ヘトホ言

国立国会図書館
24.9.5
圖書館
25502

南嶺子巻之四

秋齋桂先生著　松尾守義
山中秀蕃　同校

猿樂（サルガク）といふは。神樂（カグラ）の餘風（ヨフウ）にして神の字の旁（ツクリ）のみを用（モチ）ひ申樂（サルガク）
といふが。正説（セイセツ）の一義（イチギ）あり。又神代卷（カミヨマキ）に。猿女君（サルメノキミ）祖天鈿女命（オヤアメノウヅメノミコト）。神樂（カグラ）を
始（ハジメ）し事（コト）見（ミ）へたり。猿女（サルメ）氏（ウヂ）より。猿（サル）の名（ナ）ふりて猿樂（サルガク）とよ
ぶ。その説（セツ）もあり。然れど梯（キザハシ）秘抄中卷（ヒセウチウノマキ）。可遠（キヨトホ）元賤事條（ガンセンジノクダリ）に曰（イハ）く。猿樂參
庭上（テイジヤウ）可（ベキ）止事（トヾムコトヨリ）也（ナリ）。（○）明月記（メイゲツキ）寛喜（クワンキ）二年（ニネン）閏（ウルウ）二月（ニグワツ）廿二日（ニジフニチ）乙巳（キノトミ）。略（リヤク）。至于（イタツテ）建久（ケンキウ）下
衆猿樂被召（シヨサルガクメサレ）。先（マヅ）無（ナシ）所（トコロ）仍（ヨツテ）只（タヾ）召（メス）侍猿樂（サブラヒサルガク）。由所（ユヱノ）仰（オホセ）也（ナリ）。下（シモ）云（イハク）猿樂（サルガク）
救世家業（グセカゲフ）とも云（イヘ）り。俳優（ワザヲギ）猿樂（サルガク）とも云（イヘ）り。神樂（カグラ）なるべきの
家業（カゲフ）なるべきの事（コト）見（ミ）へたり。神樂（カグラ）なる丈（ダケ）あるべきや

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

清少納言の枕草紙などに載せたるごとのものをも正説もあるさ
とのことみて宇治拾遺物語小神樂のことなどもうるおくて猿楽
しるとあるをこれで樂人見物屋をまうけてつさあるをせ。ばどけどせん
しものる時りこれで唐の散樂といふ。いろくの役割あて上手役そ
竿なごのわざ輕飛などまでをいふの。散樂の音物して。サルガクおろう
ろもや。今旅て稱するものそ。さるごまおわごく文章時代をあやまり。
古語盛衰をもごて。そくのれあるこいへ。章譜第を正し
鼓笛相和をとうごく。千里同調ふして。見事の人をして強あ
めび古と今と物変かくのごく。貴分公子の壯観更ふ害あ
〇理ふ屋ぢう人のいろう。高放ごろ雑曲を就くふ松の緒とハ

いひるく腰小梓のうをそうまて夫ぬして其の落ちさかうべさふ
もなきてい長生されで。恥多しの諺ふ似ろ物で賀陪おく皇を用
んやとそ。玉貴をうやく利を先とろうろ注もおこれの壽を祝
ろの大板を作りて利を次をめざろ小孫ふ大人のもてあそびるとおーもろ
ろこころ。

〇唐の魏徴天すみ奉して。ので臣をして良臣となして忠臣となさしめ
ふるをなれこのことで誠ふ甚臣ろ道をはろとおべし。國のかろう主君雖
みおふよおろごれで忠臣をあるれび。孔明正成ハ軍み死し隙章良藥
君の仇み死して。昔ふ忠烈あるもろくいへ。國静み君安さ朱ふび常日
をふ見れで忠臣をあるそー。ねふ良臣となんるをを結も君の政

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

ふしく。國のれなく君ことを恐ときハ安くして変なしやしてことをはばかれ
で治世の良臣忠臣の名を蒙らむ君を全くしめんの志良なるべし
なるべき事を魏徴傳みるべし
○少しの間。ゆくて駿河國吉原と
農のもとに十日も逗留して長荻なる
涯先生に受書法を廣澤翁に学びて
で関を越えんとするに富士嶺冥
あれし芝川苔布雲うちみ休して後
嶺一のぞむ時あり。終宵みのぞむ
とそれありふしく狂句をで

ふあるとや侍りまく。先年のかりて西来迎と
見るふ山のそびえまさびし。都府をの
間よ三里もいふべき所見えしやはでな
あるりしく赤やとやふしおびを。郎
で三里もいみづぶ。よそはねばで三里も
みて日ふ映じそうそくあやしくそうの
のいでき日の出る方ふよろてぱでゆるぐそうの
まぐひふけまで石も佛くおぼれ。そふ山
んこのむらぐかくびや。
○古き寺なぐ閻魔王の下といふ

と成よう。甚平を召ふ。木下にて言てくれ。壽の字福の字なり。桜ばなみの二ヶ所ありてそしやれいろのおもかなろう人まくも皆歌れまでさやふ。添をなぐるとそうていでく後ゆくべく又の孫陀如来の流行文にて皆も極楽へまろうふ便をされていでびもあり人の若要をいよおそべ仏法の方より着ても経も信もおろそあんや極楽の東門を相撲歌舞伎などの関口と同じてのあろや今世の如き邪智ふ強き人多きふも或はまろてと一向論の平家物語ふ隔魔王のもとふく法を毒八蓮おこるそして供侍一人そべとて称讃浄土の経をめさそして五乙奥官のまま書ふ。年号ハ永大月年の年号を用ひられ。地獄極楽も大日年の魔下

とそくろ。慈心坊冥土より帰りてそくろ清盛公へ申上ろふ。その時ふ来ゼの間そのゆ井とふふ今ふ彼寺ふ伝わり。皆とぶいでけ。悪人そくろ極楽へ参ぶけ。参るべし。所く

○阿弥陀を求て修りをそくろと惑ひ理中して理をさだりて格物致知ふ心ハ山寺。天地のふ限そ。人の智ふ限あり。水ハ流れ土ハ止るものこそ。何そ善をさするふ力を用んや理を後ぞるをやうて。たゞ南無阿弥陀仏

○無住の孔世若氷安喜寺やけう。今国山源坊門鳥居東へ入處そう。東山そりて建立ふ。源照後小松院の御ぞうと崇るそう。知て業衣をそう育人も業衣をそう

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n　ガラス使用

なりふさ。又旧記み建業福市とあり。いづれの時よろ検校と云ふ名目をもてまりてむしろと八珠をつらぬるやうなるものをもられり。熊野権現をはじめ大夫師時卿の記号長秋記にみえ女久万乃浦ともよめり。謡曲もおほくいでたり。

○一とせ越の数寄ふ招びて名ごの崎にて新田義貞のまもられし城趾みて。風景絶ふとぞ。八月十五日、お祭をうつる上宮八海の祭にて。三十五六町あなごろの門人古ふを訪ひて盃酒酔をあたゝ

接待のあるじその家の育人をはじめ村うの海人あつまりいとにぎはしく。青八ガイ。請ふそ。ウニ。しほ彼育人あざやかにして海月をそげ。海人をあまの苦をのう。海嵐をもてよふしたゝかに八。エラもつくるもなきもの。よも聲あるふうらびや。いづくにやりありやとも。今までに知ざりしてやこゝぬうちをいつのうてに更ふ益あり

○可成誇ふ主水をモンドとよみ。掃部をカモンとよむるいうるもあづかしとそ。ちなべてのあやまりを。モトリとそいうる太和語ぞ。もゝそくさ。あふ舊ふを主水司をもとりをもて。ずあいモンドをよびまちがふ掃部をカモンとよふ古語拾遺よろ転草不芸育合尊の故ふ

25502

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n　ガラス使用

より起りて。事を論ぜず。くそまじめなりし。笠をうくあのまうしをそこのけより解守とよび名をとりて後統ぶ掃除の支号しるべ掃除をカモンとよむ。具してハカニモリ略してハカモンなるべし細要之。

扨何そそのうけそれぞれいそんや。されば保止毛比中辨を奈加乃於保止毛比とよせる。なるともひの判いかいうおろうるものや。官名の一つの雅なり。人参の和名加乃仁介久佐原久末乃伊とあり。以上ハ和名抄人参をくまのいといふ。仍て統脱とあるまうしやすまじや。

○予北久栄の時。和泉を岸和田にありて。おそれてお〻ぶ。ありふの浜を日ふれうとふぶつめを人ぞうおろ蛇と

のく猫おそれて半船ばかりを奇事と思ひて。そこに漁する人をびていそびく猫を蛇をよりこれを。蛇を猫の喰よりこれをとりて手。猫いそよりやおそくそれをきてとりて手。猫いそよりやおそくそれをきてとりて手。猫いそよりやおそくそれをきて

れをでをかさごめさものくと二ありう和
尚あるまよう流さもあり万緒の仏名をとあて等をとへもられ一畫像くみ
祝をえんでくをへくく仏五くおよそ其の畫影祝もみ梶井宮の寶
庫ふけり。今此境内の社の神像皆おり。サよ菅公自畫の像とい
あるアー。ナそをへくもけくおよべきやうきやうきまよ孫ありてそけもの
やあ。子彼御所ようて。神像をもおー仕りぬるふ。誠よ皆人ばも感仰
ろへ玉ヒの迹をべ藁蓋ふみ在ーおてこのをそをるものそれハの諫儀の
此ミコロれ仏よろといぐねをれを思り。去年新造のあれてーきて、神威も
まくくやうけく沙をはべきや。彩口をひんや。淳定あり。維摩
院已講の曰。山王の社ふ奠口をひて。学ノ央証の後をほきよ打くる

りふ不律の僧ありて。山を離放をる時。証緒をおひて。ここな山ふ侍ります
整徇ふ奠口を打ふて。鄰山をる法古来よりの義なり。ゆえ奠口をけ
らんやうて。終よさえ祟りね後日ふ園揺動を挽もるに諸社比鈴奏懸
鈴曳之啓白其社氏人退其地不再歸一心決時。叩鰐証爲此誓此故神人
有犯罪放于他郷時使其人叩之立不可歸入於神地之盟そて神人
備伯教よ忍ざるを追却をる時奠口をのれるひて号を叩きて再ゆりま
きの指を盟を当さもーとへくり。諸行く詰をる人ふみ口よちらごでめあ
あづさるようて侍れ。

○疱瘡を胎毒のまざとる。古みいふ膿漿号をりあて諸行ましく
なれれ。其父母夢よ痘鬼を感じ。つかおねる音ふ於あをさ。あやまき

ぎみもひとしほ新聞二條のひとり
ありさまもうさるるをいとびおどろき二
伯父但馬國気多郡伊福村そ。小田垣估
皆幼女なりしが第一の疱瘡よりてうせ
ぎみりう。大路くいふそ廿四五町もひでてつ
名をおもべきものあらびぢ馬ちいよおよ
門ふつ手ふあくぬく死ーろ。その妙百よろ
おで大路くいんとのを他くいひ疱をもそあ
二家でうみく。おいひもまさゆーぬよ。歩ぬ
ここぞ。おぎやうて成人のでー。ちうめびる
ゆーぬの人。をこうてひよそ安穏なし
くふこそをうあゆーりうり。たちまち熱
しその時のある母父なく伯りー人伺のあ
礼祈そうち伺ぎさるものぎり。醫人犯学ふ
ぎうべー人基ふをそうあうふ除疱
媚多のりよのくハ基嬰児熟安く疱と見
列ね。敬屋もう事。明神よ伯ぎべー此礼敬
しー。毎児をでにはてそをひむるくぬねぴ
のうりうり邪おりもまカふけんとなひぎやそのよを
指異の一ろ人力をねさげ切ゆんとやあ
ゆーぬの人。をこうてひよそ安穏なし
くふこそをうあゆーりうり。たちまち熱
しその時のある母父なく伯りー人伺のあ
礼祈そうち伺ぎさるものぎり。醫人犯学ふ
ぎうべー人基ふをそうあうふ除疱
媚多のりよのくハ基嬰児熟安く疱と見
列ね。敬屋もう事。明神よ伯ぎべー此礼敬

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

ふ甚児を侵よ至ら如大量の君子あらて。瘡鬼を祭る事を禁し。巷のもろきを救ひ罪よ免ら狂ひ。瘡そやよる鬼を侵ばりめ。て善人ともれを救ひれで甚れよ報し。愚悪の人そ。皆を教ひそれで教ふ示ーて。驕慢さろみたるべく。邪霊そ敬ふろ人ふきよ祈をて日と張行盛みたろの犯ることべく。瘡鬼ぞあんや。皆皆胎毒のくいふそ理備考流の説のそ。鮮ふ色とそじめ。瘡をうけぶ他處くふありその逃のそ胎毒ぶてそさおもあるべく。鬼ふくまりべく。児ふ祀ーて善をふの酒とのく食を求むろーふべー救ひべく。児もあすーふがふよ大人ふ。も賤鬼よ屈ぐ伏よ嗟呼あろそろ。

○蜘蛛よ畏れ暮よ色を変ふろ類を。活物をれぞもあろべー。

ふ名ろるり一牛仲といひー優曲の者を。刀豆よ畏れ色変り魂を失よ。

皆を秘ーて和物ふーて出ぐよく知りて芸術よそあり以ぞ。又導らの手術ふ処ある医人あり。高麗薬餅をそてら色青くなろ畏ろる甚ー。当帰氏芝元。但馬山で石ぐいふ處ふも刀豆ふ畏れく皆を祝ろる蛇蝎のごくふげまびーくありそ。志ーもろ祈謂をまーびふれで薬の相畏る理もおーざれるやや。

○續日本紀第四元明天皇　甲三代和銅四年の文をろふ後文ふ来穀ら年とあり。省俏ふ五石七斗ら年をれぞ後の貴さるのかぞりなりまを以百姓奢ふるれく。倉ふをーさるれー。者俏とふ元百よろーぎ九十六冬

○天照皇大神ふ朝家の宗廟なり。公卿百官とりぐも。れよ祭る

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

ごされの延喜式の皇后皇太子の幣物をゆるすの禁あり。いんや賤民をして宮社ふ則近しむの非禮をいん百練鉄笋四日長元三年八月五日間祭主輔親去六月荒祭宮託宣之趣申云。齋宮頭藤原相通妻宅門作大神宮寶殿詐假神威誑惑愚民其罪已重早配流者八月相通配流伊豆國云云後世の巫覡等私ふ己を家ふ祀祈禱して神威を借をよろしからんや庶人の家門ふ天照大神八幡大神等ふ天子の祭場をかゝ侵汚の僧上おそれ多き而已ならず。

○土左國赤岩という處ふ安居院という巨高あり。ふ従うく等術を学ぶ間ふ結ろう。家ふ代事出事ともふ慈あるを

度ふ竈の後より。山伏出くあれよくと問ふ消失うるの。ふ代ふされたその始いつよりもとび。ふよ亦老母いて十ばかりあまりて次第ふ起臥ふよ病をとゞろこまやかにして。ふ昼夜ふ看護の者のいとまも眠ふ就をえていやがおくにて。文ほち文でうるのぞ思ひそめつゝ出ーとうくけもてこびめうたふ。ふ母おどろくまでありふ門衛をよびおこして出ずることえくち。ふ海ふ入ゆきてありふ。草履と褌を捨ふ着おまで。入水せうとて。その日を言とゝして。

仏事いとのこまりぬ。母を亡てよう。山伏も安びうる事もあり事みやとを問ーとまでに。ふ亡子のあで仏後ふ多くふ祇理のなどもとざなう。彼病痛も解ふおこびて。船中ふある何甚母情を勝ち

多く食品のおおびに禁を侵すの故あ。胎毒滞つて發するの瘡なれどこを。上舌質赤の人は是をうけび情を労するのときくのよく才をそこうむる地の人も今もこを用いるまで疱瘡すび才ゆうる人八九分の人のこまりぬ。疥おのてもあらそれび肉中にそる。嵐あでこをおつくごく。痘に乳を察して鬼托ーよるといふ狐のこざそるべー。岡山處あてん。痘児ある處に狐こびしくまるこう。妖怪といふあ十あ九そ狐狸猫の所為そう。人甚だ逸

ぜ巻るべきにおくび。

○野狐を敬して猶生の神號を潜しー。福を祈り慶を求むる頌辺の匹夫甚だ多しー。そこ野狐ふこれをそして家しむ術あるも。ぺくて獣よ

手とる敬尾ーて恥辱とそそぎる人外の論をこるも。益そんば。吉凶禍福と狐よりもそる使まこて悲しむべし。金銀そ野狐の經み為のみくいあるべくび。野狐こあよ号をあこんや。平視のこみもあくび。僧侶狐そて幣を捧ん是這僧即狐の同類そう。釋迦如来一代の諸経ふ野狐の力を假て祈得やうこありやいのかそふの為人そも人のうこと名づけ。生冥う死ーて死冥ぐそこーぞでいで。苦ん。経力おくさやのるもいのこくそこを仏ぞ狐力をうんの。各甚巻とる経までを人かやーゆを。狐の力のくふ名號をそんこそこそ狐よりつそこよあおく。人面獣心甚だしくそけぐものり下よつぐきく

のう人としてきざはのあふ列よあふふ。をなして信ぜう徒さけどもの人
二等下めつくるさぞあさ海うびや。
○近年我が者いふもの出来てその門すよ
发名の下づうさをを名づけ。将衣浮衣を
みて。神を售る。順の和名抄を盗人の
く称り。天おより命爵もをさ人をを以命し
をれた。我が方その林を芸苑と名づき。豆腐なの二字七なれた。我が
松川左京と号るをごの先祖をうけの吴松なる姿よりでち。鳥帽よを
いうざさ。ひ家ふおそれをぶ顧びをくぎまうる西の空を太利等んむふふく
今兵ーてうべーその替名をく表向の人ち用いつとまびべ。その鳥帽子

浮衣をく町内の出会ふいふおよぶび。宮社くを条治もぬまで。紛れで名えをつる。
表向くもをーお鳥帽子をけ。歌舞伎のごくなり。向よの斜を傾るあり。
他のろ面をおぐるーむうあ。かる非礼を。神それれを言んや。窓のべー
○僧侶ふ痩ているやや。儒書を漢音のてよむべー。佛書ハ呉音ふ
てよめうそ。桓武天皇ぬ動よ定ーたをとそく。○類聚國史百八十七
佛道部。桓武天皇延暦十二年。四月己酉朔。丙子文曰制自今以後年分度者非習
漢音勿令得度云。呉音を訛謬多く。経意を誤るれあり。即ち桓武帝の詔
みく。佛経ふ呉音を棟ぜーうの萬世の通規のふ。後舊説をその
まふび。呉音を以て経を諷誦するハ。勅制よ乗つとふびう。唐國よ
祭酒李涪刊誤ふいふあよ。呉音ハ上聲を去聲とーち声

上声とするの辨あり。日本紀略まて延暦十一年十月。佛書八漢音ふよろしくこの勅あり。おれど佛書とも小異を生ずるに故實ふそひけり。

○仲尼備まて至る。靈公の夫人南子ふ召して相見え。南子淫行の悪名あり。後ひゆきて門人子路說びさる。仲尼ふおよそて予が否とさ所の者あらば天厭之天厭之の誥あり。柳下惠ひとり寢ふ美女一宿を請ゆるしてともにめぬきたるに人ともを疑えび。仲尼ハオあるゆえよその門人ふおびびて。矢をそて。都ふ悪人を才をさおふ悪人を美さろ。即是聖人なるふよりく。後世の儒者の固さろさ誠ふ天淵なるふ。

○大坂小紫仲さいろ人ありて和学小達し萬葉集代巻記。古今某餘材集百人一首改観鈔。和字正濫原中拾遺。川社。雜記。勢語臆說を始め数部の書を著し。先達不朽の名を得たり。舊文ふ徴を取。後学の為ふ多し。ゆえ千載の一人をいうべきふ。ふる小だに萬葉を以て主として後世の学を為ん。それおろかの至甚あるものふて。當時新拾遺以後の風を非るが如く。集を撰ぶ時。其時の人の名そぞれそれぞれの集ありて。その集ありてのち時の風よあらわるくも。當時の風ふかの入ることくの人のふ。時代の風をさるさ知らざるを視とてろく。太古の萬葉集を進縄みて。後の学を誘

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

もいふん。杜預が左傳の癖あり。笑仲が萬葉の癖あり。笑仲が學の達人といふべし。今這の書人といふべからざるろ。

○得長壽院今を三十三間堂といふ。大佛堂の南よりの。其棟木に一本の柳のやうに侍よ。其實否ハ予未だ見ず。世人をして語り人多しといふ。大木もあるものなり。貝原書紀景行天皇の巻に引紫小長九百七十丈の歷木あるものとのせられたれど唐太宗外國より火浣布といふものを獻ぜしその辨をもとめ給ふ後日小ふくろに貢ぶ物ありてそのうつくしびを悔文集みあぐまうをのせ勅あり。とかくりが才量のかぎりあるを以天地を變化のかぎりあるとおもふ學の

○極樂へゆきて蓮の臺ふみぬるも。ひぐらしの露厄あるべし地獄へゆきて呵責よあるへ病やみ死

地獄へ陥る罪人を呵責あいと多く。依而
そのいわれあり。往生の合をもって罪と
物の理を考へ。ありてそねごそれね教ゆ
ひとへおこご如来の第十七十八の願よまる
摂取ろろろろこごひの多なく。ゆるやらして安楽く才多
を出ずねんめ方。学者人のあ一助のさもあびぐもも
学解を立る宗名ごろ次第ふそやびおろ
ほんく解脱ろ。
○むーある清廉の宰吏のろろそご支配ろる地の百姓町人
なくろご方「まりでーのさざりれ音物を贈る。その者と他の
ふりあって裁断およびー時筆を取牛角めてさごさる
るふつご方こなくる物ろる者をもごろ
をこうぶその心底ろりごこと合せこ
法よ前掛させーめんちとそくろ。し
なくあるをそひーだふゆろれねあ
ゆるーろくのんでも清廉なるそ
おてそやおんをそびぬをへられごれ
をして探る訴の人あろーむる。己ごこ
それおそまごろごんや。

南嶺子巻之四　終

岩久
浦惣

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

寛延三庚午年六月吉辰

書林

大坂高麗橋壹町目
芳野屋十郎兵衛

京都寺町通三条上町
芳野屋八郎兵衛

書南岳子後

南山欽士秋之奇桂先生ニ
於弥而南岳子亦雖
思鐘情乎而若ニ人谷語

說文以俚說俗語
焉先生以
本邦典故之學鳴于世蓋
皆有所學而云
主主申而已書實氏
乃上梓 藁本松尾氏
校合再次出毛氏書
未乡

池惣

慈雨樓藏書

滄海一粟

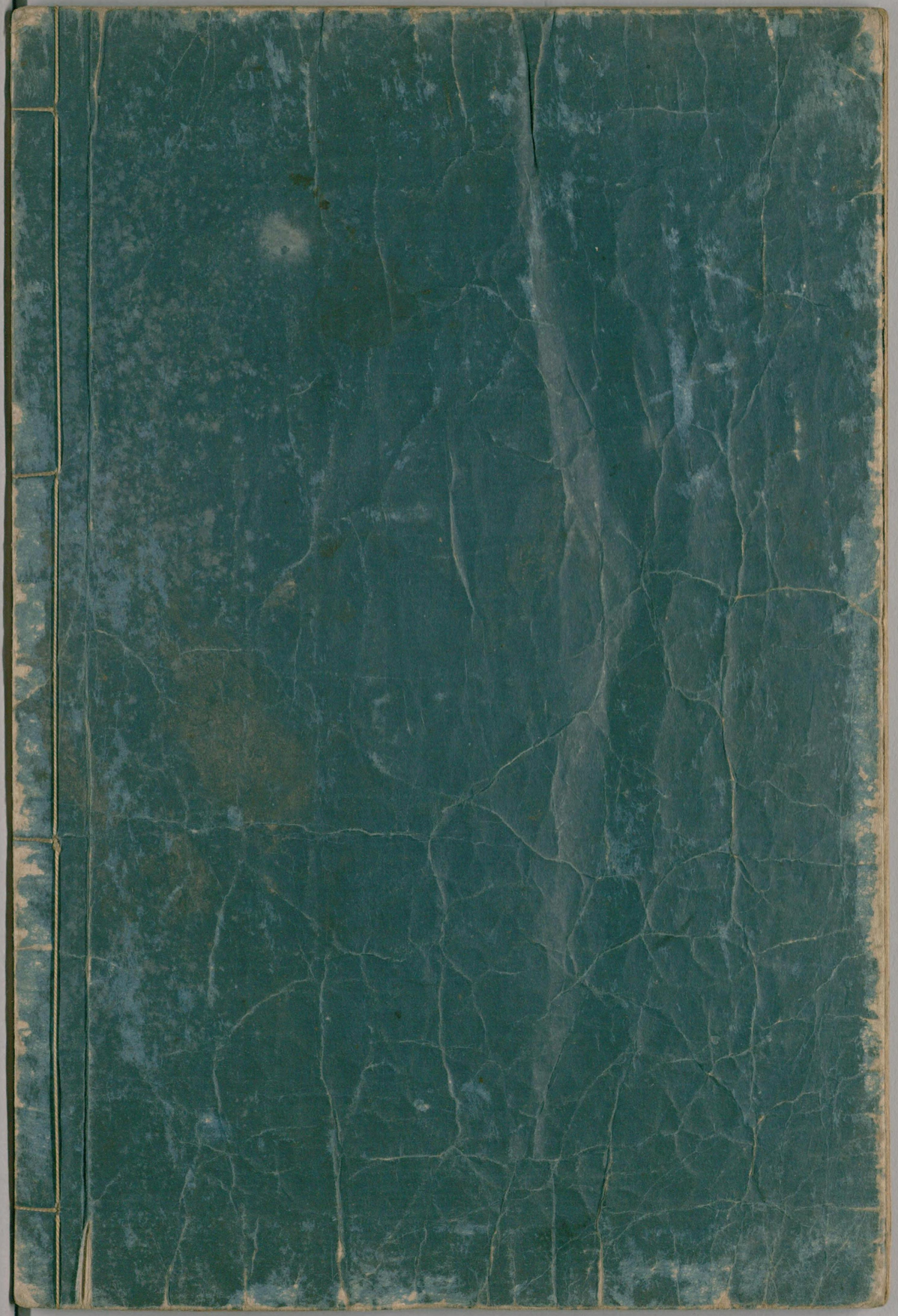
寛延己巳九月

門人山中游竜 秀藻 薄洲

樂書無用若致假り
可爲也事者や 豊後度
役所

雨窗閑話

門人 役



国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n

ガラス使用